



うぶすな

茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所

茨木市元町4-3

072 (622) 2346

<http://www.ibarakijinja.or.jp/>

嘉節千弍百年

茨木神社宮司 岡市正規

今年、奥宮天石門別神社が此の地にご鎮座されて千二百年になります。それはまた、此の里が誕生して千二百年でもあります。

当神社社伝には、「大同二年坂上田村麿が前切の里をつくりし時、天石門別神社が鎮座された」と伝え、明治十二年、茨木村の歴史・現況を初めて記録された「茨木村誌」にも「大同二年二月坂上田村麿茨木町ヲ作ル是日本町ノ始ト十二朝集二有」と記されています。

この慶祝の年にあたり、昨年より種々の記念事業を計画してまいりました。本年一月から、まず本殿瑞垣とその内庭の改修、そして本殿周りの雨水処理・整備を進めてまいりました。

(上掲写真)

本殿瑞垣は、元和八年(一六二二年)の本殿創建後の貞享三年(一六八六年)に初めて板葺にて造営されました。以後、度々改修が行われてまいりましたが、この度の修復は、昭和四年本殿屋根葺替時に改修されて以来、実に七十七年振りの修復となります。

続いてこれからは、天石門別神社玉垣内庭の改修を行い、九月下旬に神具類も新たに千二百年祭を斎行致したく予定しております。

葦原中国

神さまのおはなし ⑭
あしはらのなかつくに

天照大御神さまは、御子である正勝我勝々速日天忍穂耳命に「葦原千明長五百秋水穂国（葦原中国）は、あなたがたが統治する国です」とご委任なさって、高天原から降されました。天忍穂耳命は、天の浮橋にたたれ「葦原中国は、大変騒がしい」と仰せられ、高天原に戻り天照大御神さまにそのことを申し上げられました。

そこで、高御産巢日神さま、天照大御神さまは、天の安の河の河原で八百万の神さまを集め、「葦原中国が騒がしく荒ぶる国つ神たちがたくさんいることを考えると、どの神を遣わして説得したらよいだろうか」と仰せになり、思金神を中心おもいかねのかみに思案おもえさせました。八百万の神々は「天善比神を遣わせましょう」と申され遣わしましたが、天善比神は、大国主神に媚び三年たっても復命されませんでした。このため、高御産巢日神さま、天照大御神さまはまた、諸々の神さまに、どの神を遣わすのがよい

かお尋ねになりました。そこで、思金神が答えて「天津国玉神の子、天若日子を遣わすのがよろしいでしょう」と申されました。それで天若日子に天のまかこ弓と天のはは矢を授け葦原中国に遣わせました。すると、大国主神の娘の下照比売を娶り、またその国を手に入れようとともくろみ八年たっても復命されませんでした。

それで、高御産巢日神さま、天照大御神さまは、諸々の神さまに「天若日子は久しく復命しない。また、どの神を遣わして天若日子が長い間葦原中国にとどまっているかを問いただそうか」と仰いました。それに答え「雉の鳴女を遣わせましょう」と申されました。高御産巢日神さま、天照大御神さまは、鳴女に「お前は葦原中国へ行つて天若日子に『お前は葦原中国へ遣わしたわけは、その国の荒ぶる神々を説得し帰順させるためである。どうして八年になっても復命しないのか』と問い正しなさい」と仰いました。鳴女は天降り、天若日子の住みかの入口の桂の木の上にとまり、天津神の言葉を伝えました。すると天佐具売がこの鳥の言葉を聞いて、天若日子に「この鳥は、鳴き声が大変悪い。射殺してしまいなさい」と進言したところ、天若日子は、天のはじ弓、天のかく矢を持って雉を射殺してしまいました。そしてその矢は雉の胸を通過して天に射上げられ天の安の河の河原にいらっしやる天照大御神さま高木神（高御産巢日神）さまの所まで届きました。高木神さまがその矢を取って見ると血が矢の羽に付いていた。高木神さまは「この矢は、天若日子に授けた矢である。もし、天若日子が、命令に背かず悪い神を射ようとした矢がここに届いているのならば天若日子に当たるな。もし邪心があるならばこの矢で災いを受けよ」と仰り、その矢を突き返して下したところ、天若日子が朝寝の床で寝ている胸にあたって死んでしまいました。これは、返り矢（敵から射た矢をそのまま射返すと必ず相手にあたる）の起こりです。また、雉は帰ってこなかった。それで今の諺に雉の頓使い（行ったきり帰ってこない使者をたとえる言葉）と言うのがこれです。

これからの主な行事
大祓神事

六月三十日 午後二時斎行

茅の輪くぐり 厄除神楽

茅の輪守・粽授与

夏祭

七月十三日

宵宮

十四日

本宮 午前十時斎行

神輿渡御 神楽奉納

末社琴平神社例祭

九月十日

石門別神社御鎮座

千二百年記念大祭

九月二十二日

例大祭（秋祭）

十月十日 午前十時斎行

七五三詣

十一月中隨時

祈祷者にお守り・おみやげ授与

末社恵美須神社例祭

十一月二十日

石門別神社記念祭

十一月二十二日

新嘗祭

十一月二十三日

大祓・除夜祭

十二月三十一日

シリーズ神道

「祖霊のまつり」その一
 〈祖先との交流〉

人はこの世に生をうけてより、誰もが必ず死を迎えます。

私たちが今、この世にあるのは祖先からの生命の灯火を連綿と受け継がせて頂いているお陰であり、古来より私達は祖先を敬い感謝の気持ちを含めて、祖先の御霊をお祀りしてまいりました。

そして、故人の御霊は永遠にその地に留まり、愛しい人や子孫と共に生き、行末を見守ってくると信じてきました。

この様な伝統的な考え方は、今日様々な形で伝えられています。

例えば、自らの家や田畑に山の神さまをお招きする行事が各地で見られますが、これは山の神様となった祖先の御霊が、人々に恵みをもたらすために山から里に降りて来られるという信仰からであります。

古代の人々が祖先の御霊は子孫の生活する地域近くの山頂に留まり、時季を定めては子孫と交流するため降りてくると考えるのは、

いつまでも自分達の近くにいて見守って欲しいという願いの顕れで、その地から望むことのできる高い山の頂きが神々の聖地として、または祖霊の永住地として信じられてきた事の証です。

また、日本には多くの年中行事があり、その中には、古くから祖先の御霊を親しくお祀りする特別な行事が少なくなく、そのひとつに「お盆」の行事があります。

「お盆」は、仏教の色彩が濃く、仏式の行事として今日では一般に広く知られておりますが、祖先の御霊をお迎えしお祀りするという信仰は本来、仏教が伝来する以前より日本人特有の祖霊の信仰に始まっているのです。お盆の行事に「迎え火」と京都大文字で有名な「送り火」があります。この行事も「火」に対する信仰のひとつ「火がこの世とあの世とを媒介にする」という祖霊信仰に由来しているのです。



奉賛会だより

四月十八日は、当社の祈年祭(春祭)の日であり、本年もそれに併せ茨木神社奉賛会の厄除安全祈願祭と総会が開催されました。

本殿に於いて、国の繁栄・農産業の振興及び奉賛会員の厄除安全を祈願しました。その後、御鎮座千二百年記念事業の一環の本殿瑞垣改修工事で整備された御垣内を見学して頂きました。

それから会場を参集殿に移して総会が行われました。昨年度の事業報告・決算及び今年度の予算、また欠員となっていました副会長・理事について、総会において承認されました。

総会の後は、宮司より「天石門別神社御鎮座千二百年」と題し講話があり、茨木村が形成された頃より現在までを四期にわけ当社がどのように移り変わっていったかについて説明がありました。

その後、直会・懇親会へと移り盛會裡に総会は終わりました。

奉賛会では、随時入会者を募っております。社務所までお問い合わせ下さい

尚現在の奉賛会役員は左の方々です。

(敬称略)

- ・ 会 長 榎浪新三
- ・ 副会長 安達太一郎
- ・ 木内孝至
- ・ 会 計 金原藤雄
- ・ 会計監査 澤田義友
- ・ 堀 茂夫
- ・ 理 事 中田耕平
- 信垣茂男
- 仲辻春次
- 川勝武夫
- 大西利昭
- 今村哲夫



写真で見る

茨木神社今昔

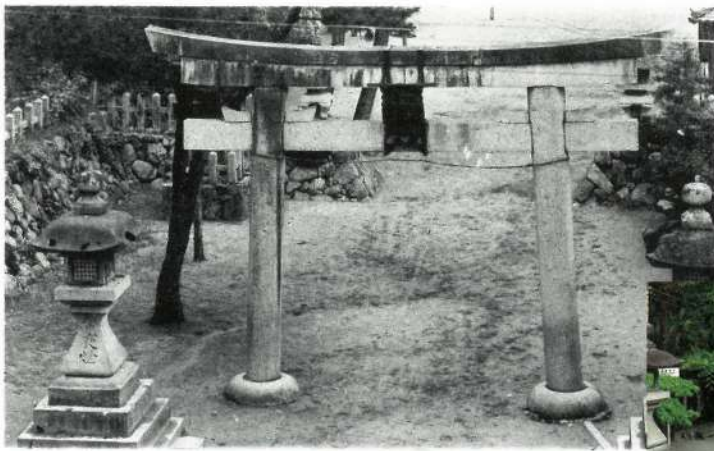
いまむかし

敷石

モノクロ写真は、大正十年頃に撮影されたものと思われます。
昭和十五年、紀元二千六百年を奉祝・記念して参道に敷石が鋪設されました。



左側恵美須神社は、昭和38年（1963年）に改築されました。



昭和57年（1982年）茨木恵美須講三十周年記念事業として左右の春日灯籠奉納。平成五年には、皇太子殿下御成婚・神宮式年遷宮記念事業の一環として東門の解体修理、東参道の修復工事が行われました。